

コメント

岩崎 稔

岩崎です。安丸さんも牧原さんも、枕詞のように、自分がここに出てきたのはしかじかの事情でやむなく...なんておっしゃいましたね。ところが、お二人とも、コメンテーターというのはこうやってやるんだよ、というような実に見事なコメントをなさいました。3番目としては足がすくんでいます。

実はこのシンポジウム、安丸先生と牧原さんにコメンテーターをお願いするという主催者としての提案を持って「おつかい」に出たのはわたくしであります。お二人から望外の YES をいただいて帰ってきて、工藤さんと手を取り合いながら、もうこれで成功したも同然だ、と随分喜んだんです。とても喜んで、その時ついでに工藤さんが、「じゃあ3人目は君ね」というので、うっかり「はい」と言っちゃった(笑)。こういう場合は誰を恨んでいいのかよくわかりません(笑)。

二人のご指摘と、わたくしが感じていることとはかなり重なります。共感することはばかりです。しかし、わたしはお二人とは違って、歴史家ではありません。歴史学と歴史家に対する深い尊敬については、人後に落ちることはありませんが、自分自身は歴史家ではない。そういう意味では、歴史学の運命とそのまま心申しなきやいけない、というようなせっぱ詰まった事情

はないわけですから(笑)、いい加減なことも申せます。そういうものとしてお聞き下さい。

まず、このプロジェクトの標題である「記憶の場」ないし「記憶の場所」という言葉についてです。まあ、「場」でも「場所」でも、*lieux de mémoire* の *lieux* という、この観念が重要であるのは明かです。実際にはおびただしく多様なテーマ・素材・争点が、*lieux* と呼ばれています。「兵士ショーヴァン」という社会的なイメージもです。「カテドラル」のような建造物であれば、「場」と呼んでも自然かもしれませんが、「ツール・ド・フランス」も空間に直接関わってくるかもしれませんが、なぜ「兵士ショーヴァン」まで *lieux* と呼んでいるのか。それ以外にもラヴィスの歴史書、編纂された辞書、さまざまな習俗や慣習とか、そういったものが全部まとめて「場所」ないし「場」と呼ばれていることについて、それを物わかりよくすり抜けないで、考えてみたいのです。ですから、*lieux* という、「場所」という観念をめぐる、一種のレトロスペクティブな吟味をしておきます。「場所」という観念のアルケーのひとつは、ちょっと遠いところに飛ばなくてはなりません。アリストテレスの「オルガノン」のなかにあります。アリストテレスにとっての、ある意味で基本的な学問の方法に関わるようなテ

キスト群をいくつか組んで、「オルガノン」と呼びますが、そのひとつにあたる、『トピカ』というテキストがあります。これは、日本語に訳せば『場所について』、つまり『場所論』です。この「トピカ」は、アリストテレスの倫理学や政治学と密接に関わってくる知です。アリストテレスの学問理解の中には、知の領域と特性についてのある区別が存在しています。一方は、プラトン以来の数学的な知であり、一義的に真理決定可能なモデルです。それに対して、もうひとつの、倫理とか政治的实践に関わる、つまり人間と人間のあいだの複数性の実践に関わる知のモデルがあります。これは、ギリシア語ではフロネーシス (phronesis) と呼ばれ、「賢慮」と訳される能力です。これは数学とは違って、そもそも一義的な真理決定が行われる問題ではない。言ってみれば、「確からしさ」という別の種類の対話的な真理性に関わっています。そして、適切にその「確からしさ」の判断をする論点の発見のために『トピカ』がある。また、この『トピカ』の冒頭のところで、3つの論証の区別が行われています。第1の論証は、数学的な論証です。完全に、必然的に論証できることがそれですね。それから、第2を飛ばして第3の論証は、これはもう、完全に虚偽の論証。これは話にならない。これに対して、誤りであるわけではなくて、かといって、数学的な論証が行われるわけではないような、そういう推理というものの存在が輪郭づけられて

います。これが第2の論証です。われわれが他者と営む具体的で日常的な実践というものはみな、言ってみればそういう「確からしさ」の領域です。数学的な論証の対象ではないけれども、しかし、そのことは、数学的に論証しえないうえに、全部誤りである、と言うことはできないような、そういう蓋然性の領域。人間と人間のあいだの問題に固有の思考のモデルです。

さて、この「トピカ」は、「トポス」という大事な概念を含んでいます。これが「場所」です。このギリシア語 *topos*, *topoi* は、今日の日常語では、話題という意味の「トピックス」や「ユートピア」という言葉などの語源にあたります。これがラテン語に転じると *locus*、複数形では *loci* ですが、やっぱり「場所」です。

この「場所」という概念は、同時にまた、古典古代の弁論術とレトリックに結びついています。古典古代の弁論術というのは、けっして目的が固定的に決まっていて、その目的を遂行するために機械的に動員されたり、ただ効果をあげるためにのみ手段として用いられるというものではありませんでした。それ自身がひとつの実践知であったのです。その点は、レトリックがすでに文彩にまでやせ細ってしまった近代の了解とはまったく違います。これは、わたしたちには一番分かりにくいことのひとつですが、弁論術は、何が正しくて、何が正しくないかということについての、判断にも関わる

知のモデルだったのです。なんだか、授業をやっているようで恐縮なんですけれども、もう少しこの問題にこだわっておきます。古典古代の弁論術の文献の中でも、もっとも重要な文献として、キケロの「弁論家について」(de oratore)というテキストがあります。そこでは、弁論術の必須の構成要素の中に、「記憶」(memoria)という契機が入っていると説明されています。

また同時に、この本のなかには記憶術の起源に関する物語が出てきます。記憶術というのは、どこから始まるのか。キケロによると、これはシモニデスという詩人の経験から、始まるとされているんですね。この叙述は、記憶術がいかに大事なのかということの論証にもなっています。このシモニデス伝説は、簡単に言いますとこうです。詩人シモニデスが、ある傲慢な貴族の館に招かれて、その主人を讃える詩歌を作るように依頼されるのですが、その時にかれは、当時の試作の技法に合わせて、半分では神々を讃え、そして残り半分でその宴のホストを讃えました。ところが、その館の主人は不遜な男で、謝礼は約束の半分しか渡しません。シモニデスに向かって、「残り半分は神々から受け取るがよい」と言うのです。その宴が始まります。たけなわのころ、召使いがシモニデスに、誰かが尋ねてきて外で待っていると告げます。そこでシモニデスが、外に出てもだれもいません。しかし、かれが宴席をちょっと離れたとたんに、天井が崩落し、下にいた列席者はみんな死んで

しまいます。シモニデスだけは、生き残るので。要するに、シモニデスは半分の謝礼を、生き残るという形で、神々よりもらったのですね。

問題はそこから先です。館は崩落してしまって、列席者はそれこそミンチになってしまうわけですから、むごたらしい話です。死体を見ても誰が誰だか分からない。そこで、悲報を聞いて駆けつけてきた嘆き悲しむ親族たちのために、その死体のどれが誰であるのかを思い出してやるのが、シモニデスなんですね。シモニデスは、あれは誰、これは誰、というように想起してみせる。こうして見ると、記憶術とは、そもそもが死者について語るというところから始まっているわけですから、これは実に示唆的な物語です。記憶術の記憶とは、最初から犠牲者としての死者の、死の場所と死に方をめぐる記憶なのです。

その時、シモニデスの記憶術でも「場所」が問題になるんです。死者たちは生前どこにいたか、ということが想起されなくてはならない。それは、空間的に行われるのであって、門柱と門柱のあいだとか、壁の近くとか、「場所」によって記憶されるのです。この記憶術・弁論術と「場所」、記憶と「場所」との関係は、古典古代からずっと下って、ルネサンス世界においても、顕著な実例を持っています。たとえば、ジュリオ・カミッロという当時は一世を風靡した人物がいます。今から見ると山師みたいな男なのですが、かれは、「記憶の劇場」というア

36 コメント

アイデアと試作品を持ってルネッサンス期のヨーロッパを彷徨します。「記憶の劇場」という世界の真理を表現した究極の建造物を建設する資金スポンサーを探しているのです。実際、カミッロの「記憶の劇場」に夢中になるパトロンたちがたくさんおり、実に多くの書物が書かれます。この「記憶の劇場」もひとつの建造物であり、知の本来の位置関係を示した「場所」なんです。ちょうどこのシンポジウムが行われている教室は、ごらんのように扇型の階段教室ですから、ちょっとこれに似ているところがありますが、「記憶の劇場」は、円型劇場の光景を想定してください。同心円的に観客席があり、いくつもの出退場の入り口を示す門柱もある。

「記憶の劇場」論とは、その劇場のどこの位置にどの知の要素を配置するのかが詳細に規定されている空間配置図なのです。それは、世界全体の究極の知、「世界の鍵」、あらゆる存在の奥義の配列を描いたものなのです。典型的な新プラトン主義的な発想法でできあがっているイメージですね。これが「記憶の劇場」ですし、そこでも「場所」というイメージがとっても重要な役割を果たしていることを確認しておきましょう。

「記憶の場」のなかにある二つの言葉、「記憶」と「場所」とは、いま述べてきたことから明らかなように、系譜的にはずっと密接な関係を持っているのです。ですから、なにも偶然にノラがくっつけたわけではありません。この

プロジェクトの標題はそのぐらい背後に背負っているものがたくさんあるのですね。そのことは、ノラ自身も言及しています。わたしが申し上げたいのは、それをただなるほどそうですか、というふうに終わるのではなく、もう少しそこに踏み止まって考えてみたいということです。わたし自身、いざ立ち止まって拘泥してみると、よくわからないことばかりです。系譜的にそうであるにしても、しかしなぜ、「記憶」*memoria* と「場所」*lieux* とが親和的であるのか。これは、このシンポの議論にも期待することなのですが、ぜひお教えいただきたいのです。

想起の手がかりとしての空間的配置という問題系については、このシモニデス神話や「記憶の劇場」以外にも、歴史上興味深い存在がさまざまに存在しています。今日でもまだあるらしいのですが、「記憶師」という仕事があるんです。抜群の記憶力を持っている人が、それみんなの前で見せ物として見せる、というものです。そういう人たちが、どうやって超人的な記憶力を発揮するのかを確かめてみると、その覚え方の中に空間的な配置を使う、という方法があるそうなのです。

ともあれこうして「記憶の場所」の「記憶」は、ある個人の主観的な能力とか、主観的な属性の問題とかではなく、むしろ「場所」という開かれたものとして扱われ、描かれています。これは、やっぱり不思議なことだと思うんです。なぜ最初からそうなのか。これは、ずっとぼく

自身がこだわってきて、よく分からないと思っ
てきたことです。しかし、最近是这样子で思っ
ています。それによって、記憶の問題が、主体や主
観がコントロールする問題ではなくて、一種の
述語論理であるということが示されているの
ではないでしょうか。「なにが」ではなく、「で
ある」ということ、いわばその述語の側から事
態が成立してくるという、そういう発想が、そ
もそも「記憶術」「弁論術」そして、「記憶」と
「場所」との連関の中にあるのではないかと
いうことです。したがって、記憶にふさわしい
のは「記憶を語る」という言い方ではなくて、
むしろ「記憶」をめぐる「語られてしまう」
と言いますか、わたしたちが受け身になってし
まうような様相です。ギリシア語などに、受動
相と区別して中動相というモードがあります
ね。能動相ではなくて、中動相。この中動相と
いうあり方の中で、わたしたちは記憶に出会っ
ているのではないのでしょうか。

谷川さんが本日冒頭で、近年、記憶の問題が
いろいろなところで議論になっている、と指摘
されていらっしゃいました。まさにそうだと思
います。しかし、記憶論のひとつの特徴は、「わ
たしは何かを思い出しました、思い出したいで
す」という話ではなくて、「記憶が降りかかっ
てきた」「記憶が襲いかかってきた」というよ
うな形で、むしろ、「記憶の政治学」や「記憶
のエチカ」ということが問題になっているわけ
ですね。従軍慰安婦をめぐる論争もまさにそう

です。従軍慰安婦をめぐる論争は90年代以降、
急に争点化します。しかし、これも歴史家が作
為的にそれを主題として設定したというので
はない。むしろ事態としては、長い間沈黙を強
いられてきたキム・ハクスンさんたちの「突然
の」問いかけが発端です。慰安婦にされてしま
った犠牲者たちの声が、深い忘却にあったひと
びとに突然襲いかかってくる。それが契機とな
って、この社会は自分たちが忘れていたとんで
もない集合的記憶に気がついて立ちつくすの
です。そのようにして凍てついた記憶、これま
で語られてこなかった記憶、隠蔽記憶によって
押しのけられてきた傷みの記憶が現れ、そこに
記憶のコンフリクトが出現するのです。そうし
ますと、記憶をめぐる局面は、むしろ、わたし
たちが自明としていることの外に隠れ、それを
取り巻いている無数の、それまでは見えなかつ
たような蟄集する記憶に否応なく向き合わざ
るをえないような事態。そのことによって、既
存の了解や既存の枠組みが、ぐらぐらと揺らい
でしまうような事態ではないのでしょうか。

ノラの『記憶の場』の中で扱われているのは、
ほとんど全部がそうですが、あくまでも顕彰記
念行為＝コメモレイション(commemoration)の
問題であります。しかし、記憶に関しては、今
言ったような、もっと苛烈な記憶と記憶のコン
フリクトが全面的に露呈している歴史修正主
義の問題もあります。そういう記憶については、
ノラが設定した「記憶の場」という前提のなか

ではうまく扱いうることなのでしょうか。実際には扱ってはいないわけですが、もしもノラがそれをやろうとしたときに、「記憶の場」はそうしたことに対応できる枠組みなのだろうか、ということも考えざるをえません。また、これは安丸先生や牧原さんたちが言及されたことにも含まれておりますし、谷川さんも最初に設定されたことでもあります。ノラ自身が大きく変容したのではないかという問題です。このプロジェクトの意味が途中で変わったのではないかという問題ですね。メモラシオンという素材を対象にして扱おうとしたんだけど、むしろそれに呑み込まれてしまった、という非常に気掛かりな指摘もなされました。ノラ自身は、自分のしてきたことを説明して、ある種の「歴史叙述的な非連続性」を生み出すことができたのであって、「記憶の場所」は歴史学の新しい段階だと書いています。谷川さんも、新しい社会文化史であると議論なさいましたが、それにはなるほどと思うところもありますが、気掛かりなのは、それにもかかわらず、ノラのしたことは、あるポリフォニックな形での、国民史の再建になっているのではないか、ということです。記憶と歴史に関して初発に見据えられていた対立はどうなったのでしょうか。そのことについては、牧原さんも御指摘になり、安丸さんも同じように仰いました。わたくしは、記憶と歴史の、非常に険しい関係を考えるということは面白い問題提起だと思いま

すし、衝撃を受けました。ノラの初発の議論には、歴史というのはある種の「記憶殺し」なんだという議論が出てくるのです。歴史家がこんなことまで言うのか、という気もいたしました。しかし、それが最後の時期には、ポリフォニックとはいいながら、ある種の別様の国民史に回収されてしまうように見える。そうであれば、最初の約束とは違うのではないかというふうに思わざるをえないわけです。

20世紀の後半において、とりわけ70年代、80年代、90年代において、明示的に単一的な国民史の語りや、単線的なナショナル・アイデンティティというのは、かえって支配の様式としてもすでに存立不可能になっています。何らかの格好で、古きナショナリズムは変容を強いられているが、強いられながらグローバル化の中で巧みに変態を重ねているということもできます。それは、むしろナショナリズムの新しい支配的なモードになっているわけです。そうした現実と、ノラのこのプロジェクトとが、果たして本当に批判的な関係になっているのかどうか。むしろそのまま協和音を奏でたり、弁証したりすることになってはいないだろうか、ということが気にかかります。ノラは、確かにフランスのナショナル・アイデンティティの生成過程を遡及し、いったんはそれをバラすわけですが、しかしバラしたもの、腑分けしたものを、再び、しかもまさしくその同じ要素で、組み立てを変えながら、別様の「ポリフォニック

な」と形容されるナショナリティーを、このグローバル化の状況の中に対応した国民化の原理として再建します。グローバル化とナショナリズムとは、単純に背反するものではなくて、むしろ、この一見対抗するものが互いを促しているというような関係の中での新時代の国民史といえますか、新時代のナショナル・アイデンティティというものを作っちゃうんじゃないかと。そして、かつてのナショナル・アイデンティティがそれ自身の外部を作り出し、それを排除したように、この変容したナショナル・アイデンティティも違った形ではあれ、やはり同じような排除と抑圧と、場合によっては消去を行っているのではないかと。そういう意味では、この多文化的なモードをまとうことによって、いとも簡単に、コモダーションの時代は終わったとか、ナショナリズムは過去の問題になったと言えるのかどうか。むしろ、ナショナリズムをめぐっては、こういう多文化主義的なモードこそが、実は批判的に吟味すべき主要な対象であり、また争点となってくる、と痛感しています。

最後に、もう一度最初の *lieux* の問題、「場所」という概念の含意に戻ってみます。実は、最初に工藤さんが説明してくださいましたように、今回のこのシンポジウムは、3年目の企画であります。一番最初の年には、ゲストのひとりとしてパトリック・ハットン氏をお呼びしました。ハットン氏を招いたのも、わたしたちが『記憶

術としての歴史学』(History as Art of Memory)というかれの著作を読んで興味深いと思ったからです。その作品は、部分的には『思想』に翻訳されました。だからお呼びしたわけですが、東京外大でかれが行った報告は、アジアに来ると発言が違っちゃうのかも分からないんですが、なんだかとても啓蒙的で、歴史学というのはこういうものだよ、と教え諭するようなお話だったもんですから、いたくがっかりした思い出があります。その時に、ちょうどその報告に対するコメントをしてくれたアメリカの思想史家リチャード・カリッチマンさんが、大変面白い比喻を使われたことをわたくしはよく覚えております。その様子は『クアドランテ』の第二号の中に、わたくしの文責で整理して載せてあります。かれは、ちょうどジョルジュ・パタイユの限定経済学と一般経済学との関係にアナロジカルなものとして、歴史学にひとつの問いを突きつけてもいいんじゃないか、というふうに言ったわけです。パタイユの限定経済学というのは、いわゆる経済学、わたしたちのよく知っている経済学、つまり、ホモ・エコノミクスという経済的な行動者が前提になっているプロセスを扱う知です。これにたいしてパタイユが一般経済学と言うのは、ホモ・エコノミクスモデルからは過剰なまでにあふれ出してしまふ人間の生のあり方を対象とする知です。つまり、生産し、価値を蓄積していくという近代的、プロテスタント的主体、自分自身をコント

40 コメント

ロールし、破壊や無駄から自分自身を遠ざけることのできる主体ではなく、けっして禁欲的にならない、破裂してしまうような欲動の流れを包摂した存在が問題になっています。生産する近代的主体は、外的自然と内的自然を支配するために、自分自身の欲望を統御して未来にむけて遅延させ、あるいは欲望を抑圧するわけですが、しかしその当事者が、やがてその欲望自身と不用意に出会うような、そういう「呪われた」あり方までが捉えられているのが、一般経済学です。ですから言ってみれば、限定経済学の外部、それを囲む外部というものを、パタイユは名指すのです。これが『呪われた部分』の中の議論です。歴史学という学問のなかでは、経済学に与ってのホモ・エコノミクスに対応するのは何なのか分かりませんが、要するにホモ・ヒストリアエというものの、あるいは歴史学が前提にしうる人間、というものと、それを超えていく外部の問題とを考えることができるではないでしょうか。それが、歴史とそれを蟬集する記憶との関係として考えることはできないでしょうか。あえて言えば、記憶の問題というのは、そういう歴史学の臨界域というものを問題にすることなんではないかな、というふうに、カリッチマン氏は議論をしたんです。これはわたくしとしては我が意を得たり、という議論でした。そしていまは、それと同じ問題を、ノラに関しても指摘できるのではないかと申し上げたいのです。「記憶の場」の「場」というの

はですね、決して主体によってコントロールできるものではなくて、むしろ、向こう側から現れてくることがらをめぐる経験だということです。そういう発想法に深くつながっていくならば、「記憶の場」という設定のなかに、ノラの場合には主題化しなかった問題も入ってこざるをえないのではないかと。集合的記憶をめぐると今日の論争というのは、このことを含めて考えなくてはいけないのではないだろうかということなのです。

まともかもしれませんが、安丸さんと牧原さんをここに引っ張り出した、というその功績に免じて、これで許していただきます。ご静聴ありがとうございました。

(いづさき みのる・東京外国語大学)